

『脱法ブールドル♡KAWAIIエクспローション』

嵐田翔 あらしだかける ／ 官僚1

以倉宝一 いぐらほういち ／ 官僚2

九崎ちよ きゅうさきちよ ／ 官僚3

島山光里 はたけやまひかり

1.

三人の官僚が会議をしている。

官僚1 「時は1994年。我が国の合計特殊出生率は昨年度、史上最低の1.46を記録しました」

官僚2 「一人の女性が一生のうちに産む子供の数が、1.46人ということです」

官僚3 「もつと言うと、二人の人間の間に、1.46人しか産まれないと言うことです」

官僚1 「二が二を産まないと人口は減少します。人口が少なくなれば、国力も衰えます」

官僚2 「なぜ産まないのでしょうか？ 理由としては、女性の職場進出、晩婚化、住宅の狭さ……」

官僚3 「違いますよ」

官僚2 「え？」

官僚3 「あえて聞きますが……赤ちゃんはかわいい、そう思いますか？」

官僚1 「もちろんです」

官僚2 「私もかわいいと思います」

官僚3 「赤ちゃんを抱っこしたことはありますか？」

官僚1 「あー……ないですね」

官僚2 「私は子供がいるので、あります」

官僚3 「自分の子供が産まれる前は？」

官僚2 「ありませんでした。妻の妊娠期間中に、公民館で研修を受けました」

官僚3 「それですよ。私の持論では、少子化の原因は核家族化と世代間の分断にあります。特に都会の現代人は、他の家庭を覗き見ることがない。若者は赤ちゃんに触れるどころか、見る機会すら持たない生活を送っています。ほとんど見ないのに、赤ちゃんを心底かわいい、欲しいと思えますか？」

官僚2 「大変納得がいきます」

官僚3 「赤ちゃんはかわいいと知らしめる必要があると、私は思います。メディアを通して宣伝活動を行うのはいかがでしょうか？」

拍手。

官僚2 「知らしめましょう」

官僚1 「こうして、テレビや雑誌、ポスター、あらゆるメディアに赤ちゃんの姿があふれるようになりました。しかし……」

官僚3 「どうしましたか」

官僚1 「もつとかわいいものはたくさんあるじゃないですか。ペットとか」

官僚1、ペットの写真を取り出す。

官僚3 「あら」

官僚1 「うちのポチです。いま人気のラブドールレトリバー」

官僚3 「大きいですね」

官僚1 「世話は大変ですけど、かわいいですよ」

官僚2 「かわいいといえば、キキイちゃんとか」

官僚2、ネコのキャラクターのグッズを取り出す。

官僚3 「あらまあ」

官僚2 「娘がマニアでして。もう高校生なのに、彼氏も作らずファンクラブなんか入っちゃって」

官僚3 「お二人は、赤ちゃんと同等かそれ以上にかわいいものがあると言いたいわけですね」

官僚1 「人によるでしょうけど」

官僚3 「じゃあ無くしましょうよ」

官僚1 「え？」

官僚3 「かわいいものがあると、注意が分散します。赤ちゃんをしつかり見てもらうために、他のものにはいなくなってもらいましょう」

官僚1 「こうして、家から生物が消えました。犬、猫、うさぎ、小鳥、亀、熱帯魚……」

官僚3 「生物の飼育は推奨しません」

官僚2 「あらゆる場所から消えました。テレビ、動物園、渋谷駅、ファンシーショップ……」

官僚3 「目に映るかわいいものとしては、人間の赤ちゃんのみを推奨します」

官僚1 「そして三十年が経過。時は2024年」

官僚2 「合計特殊出生率は……」

官僚3 「減りに減りつづけ、史上最低を更新中。昨年は1.20人！」

官僚たち、怒る。

官僚1 「なんでだよ！」

官僚2 「おとなしく産めや！」

官僚3 「人口が減り続けている」

官僚1 「子供と触れ合う時間が少ないのでは」

官僚2 「家庭内の子供と接する時間を増やすのはどうだろう」

官僚3 「保育園を減らしましょう！」

官僚1 「より大勢に」

官僚2 「より楽しく」

官僚3 「より明るい未来を」

官僚1 「国は暴走していますが、それに注目する国民はほとんどいません」

官僚2 「どうでもいい、どうにでもなれ」

官僚3 「犬も、見たことないから欲しくもない」

官僚たち、だんだんと登場人物に移り変わっていく。

2.

舞台は夕方、以倉のデザイナー事務所。嵐田、九崎がパソコンにかじりつくようにして仕事をしている。以倉がクライアントと電話をしている。

嵐田 「何より重要なのは、目の前の仕事」

以倉 「（電話を切り）ねえ、そよ風ドライヤーの提案資料、進んでる？」

九崎 「それ、嵐田さんの担当です。私はプラチナでんきさんのパンフレットの方」

嵐田 「いけます、いけます。いま、微調整中です」

嵐田、プリンターから出てきた紙を五枚、壁に貼る。花の被り物をした赤ちゃんのイラスト。細部が少しずつ違う。

以倉 「ん？」

嵐田 「ど、どうでしょう、以倉社長」

以倉 「……」

嵐田 「ここからブラッシュアップしていくつもりですが」

以倉 「ごめん、頭回ってない」

九崎 「何それ」

嵐田 「そよ風ドライヤーのベビキアラ『ハナっちゅ』。花と赤ちゃんの組み合わせ、斬新で

しょ。おしべがそよ風で揺れます！」

九崎「……この世の赤ちゃんはみなそれぞれ大切な存在で、かわいい」

嵐田「ポリコレはいいから」

九崎「本当にそうだからね。この世の赤ちゃんはみなそれぞれ大切な存在で、かわいい。その大前提の上でフィードバックします。顔に集客力がない」

嵐田「ぐさー」

九崎「嵐田さん、かわいいベビキャラ、ほんと苦手だね」

嵐田「うるせえ、専門外なんだよ」

九崎「ちょい貸して」

九崎、嵐田のパソコンをいじる。プリンターから出てきた紙を貼る。目の位置が下がり、顔がより幼く見える。

九崎「どうよ」

嵐田「……」

以倉「いいじゃん」

嵐田「くそ、何で」

九崎「センスの差ですな。あ、でもこうした方が好みかも」

九崎、嵐田のパソコンをいじる。プリンターから出てきた紙を貼る。顔が描かれた花のキャラクターになっており、人間の赤ちゃんには見えない。

九崎「既存のキャラとの差別化を狙ってみました」

嵐田「きつしよ！」

九崎「なんで」

嵐田「もう赤ちゃんじゃないじゃん。花じゃん。花に顔ついてるの、きつしよ」

以倉「やつぱ若い子はそうかあ。きゅーさん、これは擬人化になっちゃってるから、今はウケないよ」

嵐田「ギジンカ？」

以倉「花とか、虫とか、人間以外のものを人間に例えるってこと。最近は言わないけど、『花が踊る』って言い方とか、聞いたことない？」

嵐田『花が踊る』？ 踊らないでしょ、人間じゃないんだから。おもしろ」

九崎「かわいいもん」

以倉、九崎が修正した赤ちゃんのイラストに、ペンで付け足す。

以倉「バランスよくなったでしょ」

嵐田「すごい、さすが以倉さん」

以倉「明日はこれで」

嵐田「えー」

以倉「専門外のところ頑張ってくれたのに、申し訳ないんだけど」

嵐田「もう一時間粘らせてください！」

以倉「時間ないから。畠山さんが急に抜けなければ、時間もあつたかもしれないけど。

まあ、そしたら嵐田くんには振ってないか」

嵐田「せめて引き継ぎはほしかった」

九崎「切迫流産で自宅安静の人間に？　引き継ぎ？」

以倉「そう！　ぜーんぶしょうがない！　一番辛いのは畠山さんだから！」

三人、ため息。

九崎「地獄め。夕飯買ってきます」

以倉「僕は帰って、自宅で作業するよ。何かあつたらチャットして」

嵐田「もう帰るんですか。なんか今日早くないですか」

以倉「ごめん、疲れて限界」

九崎、出ていく。

以倉「さっきの……比率を見ておくといいよ。それじゃ」

以倉、出ていく。

嵐田「またあの女に！　負けた！　くそくそくそくそ……」

嵐田、ジタバタする。

嵐田「人々が『かわいい』と感じる、乳幼児の特徴をベブースキーマという。等身が低い、体型が丸い、目が顔の下側にある、といったものだ。それをうまく取り入れると、一定程度かわいいキャラクターがデザインできる」

嵐田、九崎のデザインの比率をあちこち測る。

嵐田「ベビースキーマを持つ赤ちゃんに、人間は警戒心をといて親近感を覚える……らしい。これをベビーフェイス効果と呼ぶ。商品広告にベビキャラ、赤ちゃんを模したキャラクターを使うのが推奨されているのはそのためだ……そんなにかわいいかよ、赤ちゃんって」

以倉、戻ってくる。

以倉「頑張ってるねえ」

嵐田「俺はゴミデザイナーです」

以倉「誰だって最初作るものはゴミだよ。いっぱい作って覚えてこようよ」

嵐田「以倉さんもいっぱい作りました？」

以倉「内緒」

嵐田「出た、内緒！ 以倉宝一、アートディレクター兼、以倉デザイン代表取締役社長。家電、パッケージ、広告、企業ロゴ、そしてベビキャラ、なんでもござれ。あらゆる分野に代表作がある天才クリエイター」

以倉「どうもどうも」

嵐田「しかし、そのアイデアの出どころは誰も知らない」

以倉、冷蔵庫から買い物袋を取り出す。

以倉「忘れ物しちゃって」

嵐田、袋を奪う。中身を見る。

嵐田「ささみ、豆腐、にんじん、ブロッコリー」

以倉「夕飯だよ」

嵐田「離乳食の材料みたい」

以倉「僕、妻なし子なしの独りもんだよ……じゃあ」

以倉、出ていく。

嵐田「以倉さんは十七時になると、何があっても必ず家に帰る。アウディTTに乗って。どこに住んでいるかは誰も知らない。誰もみたことがない。自宅から繋ぐオンラインミーティングはいつでもバーチャル背景だ」

以倉、自販機で缶コーヒーを買って飲んでいる。

嵐田、アウディのトランクに隠れる。

嵐田「さすがのアウディも、トランクは居心地悪い」

以倉、車を発進させる。車はぐるぐると迂回を繰り返しながら進む。

3.

九崎「ここでCMです。『これからママになる山田さん。おめでとう！ でも退職祝いはどうしよう。ギフトフォーユーは新しいカタログギフト。URLで簡単にプレゼント。受け取り側がギフトを選べます。あなたの幸せのそばに、ギフトフォーユー』できる男は、集中できる。ごくっ！（ドリンクをぐいっと飲む）バリバリ！（集中して働く）お疲れ様でした！からの高い高い（赤ちゃんをあやす）集中力で人生濃縮、ゴクエナ』『見た見た？ この動画？（女子高生が集まって会話している）かわいい赤ちゃん動画がいーっぱい！ 癒される。ショート動画みるならショートタイム』」

事務所で使用するチャットツール内で送られた、畠山から九崎へのチャットが表示される。

畠山「こういうCM見るたびキレそうになる」

畠山「幸せの形を決めつけんなって」

畠山「ウチらでぶっ壊してこ！」

九崎、そのチャットに合意のスタンプをつける。

4.

夜。以倉の家。山の中にある。

ガレージに車がとまる。嵐田、トランクから出て隠れる。

以倉、車を施錠し、家に入っていく。

以倉「ただいま」

嵐田「……おええ、吐きそう……お邪魔します。（見まわし）……ボロい。田舎のおばあちゃんちみたいだ」

犬の高い鳴き声がきんきんと聞こえる。

嵐田「わーわーわー、セキュリティ？」

嵐田の目の前に、トイプードルが現れる。

嵐田、それを掴んで目の前に掲げる。

嵐田「なんだこれ。動物？ 顔がある。鼻も。嘘だろ、超かわいい！」

嵐田、噛まれる。

嵐田「いってえ！」

以倉、出てきて嵐田の腕を掴む。

以倉「落とさないで。この高さでも骨折しちゃうから」

以倉、ゆっくりプードルを嵐田からもらって抱く。

嵐田、プードルを取り返す。

以倉「なんのつもり？」

嵐田「これが天才の秘密ですか？」

以倉「返して！ ゆっくり、丁寧に！」

嵐田、以倉にプードルを渡す。

以倉「（プードルに）大丈夫でちゅか？ （嵐田に）なんでいるの」

嵐田「以倉さんの家、みてみたくて」

以倉「嵐田くんって豪快だね。そういうところ、いいなと思ってたよ」

嵐田「あざす」

以倉「もう思ってない。まいったな……」

嵐田「これ、この茶色いのって、動物ですか？」

以倉「……犬」

嵐田「犬？ これが？」

以倉「トイプードルっていう犬」

嵐田「トイプードルちゃん？」

以倉「あー、名前じゃない。トイプードルっていう種類の犬なの。名前はマロン」

嵐田「犬って初めてみました。かわいいですね」

以倉「かわいい？ 本当に？」

嵐田「衝撃のかわいさです」

以倉「分かってくれる？」

嵐田「はい！」

嵐田、スマホでマロンの写真を撮る。

以倉「消して！」

嵐田「なんで」

以倉「君、本当に何も知らないんだね。家で犬を飼うってのは法律違反行為なんだよ」

嵐田「そうなんですか？」

以倉「だから知られるとまずいわけよ。だから早く！ クラウドに同期される前に」

嵐田「えー……（スマホを操作し）消しました」

以倉「うちに来たことも、犬を見たことも絶対、誰にも言わないで。約束しないんだったら、なんくせつけて解雇するよ。転職できないように変な噂も流す！」

嵐田「ひどいですよ」

以倉「ひどいのは君だよ、勝手に着いてきて、人の家に土足で踏み込んできて」

以倉、頭を下げる。

以倉「この通り！ 絶対口外しないでください！」

嵐田「分かりました」

以倉「よかった。ありがとう。いや、ありがたくない。早く帰って」

嵐田「道分かんないです」

以倉「どうやってきたの」

嵐田「アウディのトランクに隠れて」

以倉「こいつ……マロンにエサあげたら会社まで送るから。一旦、上がって」

嵐田「お邪魔します」

5.

以倉の家のリビング。プードルの写真がたくさん飾ってある。

以倉がマロンに皿を持ってきて、エサをやる。

以倉「ごはんちゅよ。待て！ ……よし！」

嵐田「何で、家に犬がいるんですか」

以倉「これもここだけの話ね……三十年前、僕が高校生の頃まで、うちの両親は犬のブリーダーをしていた。犬を繁殖させて売ってというのが商売として成り立っていた時代だったんだよね。この家の隣に犬舎があつて、常に五十頭くらい犬がいた。僕もよく手伝ってたよ。掃除とか散歩とか。あと、木材買ってきてサークル作ったりとか」

嵐田「もしかして、そこにデザイナーとしての原体験が？」

以倉「そうかも。犬が嫌がつて入ってくれなかったり、すぐ削れてダメになったり、色々あつてさあ。犬舎に一日座つて、犬を観察した。何がダメなのかぐるぐる考えて、修理して……そうか、これが僕の原体験なのか」

嵐田「観察はデザイナーの職能の一つと言われている。そもそもデザインとは、人間にとって良い体験を生み出すことだ。手にフィットして掴みやすい持ち手、迷わずトイレにいける案内の看板……人間にとって良い体験を作るためには、人間を知らなくてはならない。ユーザーの行動の中にある段差を、観察の中で見つけられたなら、それはデザインの種だ」

以倉「サークルがすぐボロボロになる一つの原因は、子犬だった。犬も乳歯から永久歯に歯が生え変わるんだけど、その時歯茎がかゆくなるのね。だから色んなものを噛んで解消しようとする。サークルも子犬に噛まれてた」

嵐田「どうしたんですか」

以倉「サークルのパーツを交換可能にした。子犬は噛みたい、僕はサークルを簡単に修理したい。両方のニーズを叶えたつてわけ」

嵐田「なるほど」

以倉「でも、子供の頃はデザイナーになるなんて考えたこともなかった。家を継いでブリーダーになるつもりだったんだ」

嵐田「どうしてならなかったんですか？」

以倉「全部消えたから、かな」

たくさんの犬の鳴き声。

以倉「ちょうど三十年前、1994年。国内での動物の飼育が禁止された。ある日、僕が学校に行く前に朝ごはんを食べていたら、うちの前にたくさん車が停まった。父親が犬舎の方へ走っていった、四匹のトイプードルを連れてきた。僕に渡して、屋根裏の物置に行くように行った。ただごとじゃないと思って、急いで屋根裏に上がった。犬舎の方からは犬の鳴き声と、何人か知らない男の声がしていた。しばらくすると、声が止んだ」

犬の鳴き声が止む。

以倉「トイプードルたちを置いて見に行ったら、犬がみんな消えていた。父と母も。それからこの家には僕とトイプードルしかない。残ったトイプードルを繁殖させてただけど、

素人だからうまくいかないし、犬は十年くらいで死んじゃうから。このマロンが最後の一匹
ってわけ」

嵐田「すごい話」

以倉、マロンの皿を片付ける。

以倉「おいしかったでちゅか？ よしよし。パパ、嵐田くんを帰してくるからいい子にして
るんでちゅよ。……こう、姿勢を低くして、あごの下を触ってみて」

嵐田、マロンを撫でる。

嵐田「ふわふわ！ やっぱかわいいですね」

以倉「でしょ！」

嵐田「造形が良すぎる。このカールした毛並み、黒くてツヤツヤした瞳。グッドかわいいデ
ザイン賞大賞受賞レベルです」

以倉「マロン、よかったでちゅね」

嵐田「俺、子供いらなから、代わりに犬飼いたいな」

以倉「違法なんだよね」

嵐田「残念だ。……こんなにかわいいのを隠してるなんて、ずるい。絶対誰にも言わない
で、また来させてください」

以倉「え」

嵐田「俺の成長のためです。俺はかわいいデザインが苦手、特にベビキャラ。でも、こうし
て初めてかわいいと思えるものに出会えた。この犬」

以倉「マロン」

嵐田「マロンちゃんを観察することで、俺はデザイナーとして一段レベルアップできると思
うんです」

以倉「そうか？」

嵐田「俺が成長すれば、事務所のためになる」

以倉「嵐田くんがかわいいデザインできなくても、きゅーさんも畠山さんもいるし……」

嵐田「俺は成長したいんです！ こんなに仕事にやる気のある若者、俺を逃したらいいませ
んよ！」

以倉「僕、もはや君がちよっと怖いよ。内緒だよ。きゅーさんにも内緒だからね」

嵐田「やったー！」

6.

事務所で残業している九崎、こっそりぬいぐるみを取り出す。犬を模したファンシーキャラクターのぬいぐるみ。

九崎「かわいいね」

畠山から九崎に送られたチャット。

畠山「異性愛カップルの特権を行使！」

（ウエディング写真）

畠山「子供も持たい」

畠山「でもこれ、自分で考えて思うようになったのかな」

畠山「産めや産めやって洗脳された結果じゃないかな」

畠山「子供産んでも、こんな社会はおかしいって言っていけるかな」

畠山「きゅーちゃんと戦友でいられるかな」

九崎「私はずっと戦友のつもりです！」

畠山「ありがとう」

7.

以倉の家。

嵐田がマロンを観察している。

嵐田「この、お尻のパーツが左右に揺れるのはなんですか？」

以倉「これは尻尾と言って、動物が感情を仲間に表すためのパーツだよ。犬は嬉しいと左右に尻尾を振るんだよ」

嵐田「なんでおしっこする前にトイレの上でくるくる回るんですか？」

以倉「おしっこする場所が安全か確認してるらしいよ」

嵐田「なんでちよいちよい、毛が短いところがあるんですか？」

以倉「僕が毛を刈ってるからだよ」

嵐田「なんで？」

以倉「昔、プードルはよくそういうカットをされてたから」

嵐田「なんで？」

以倉「えー……」

以倉、本を持ってくる。

以倉「……ブードルはフランスが原産の犬種で、元々は猟犬として飼われていた。漁師が川や湖に撃ち落とした鳥を、泳いで取ってくる猟犬。素早く泳げるように毛を刈ったんだけど、胸とか足とか、冷やしたら体に良くないところは残すようにした。それが、ブードルのカットの起源らしいよ」

嵐田「実用的なデザインだったのが見た目だけ愛玩犬に引き継がれたということか」

以倉「嵐田くんはいいブリーダーになれただろうな」

嵐田「俺はデザイナーです」

8.

事務所で残業している九崎、こっそりぬいぐるみを取り出す。

犬を模したファンシーキャラクターのぬいぐるみである。

九崎、ぬいぐるみに向かって喋る。

九崎「ねえクークー、最近、以倉さんと嵐田くん、仲良いよね。『うんうん！』帰りに一緒に車で、どっか行くもんね。『誘ってくれたらいいのにね』ほんとに。……以倉さんはそういうのなと思うってたんだけどな。やっぱ、女だから誘いづらいとか、あるのかな。畠山さんがいてくれたら……」

九崎、畠山へのチャットを打ち込みかける。

九崎「休職中に職場の話は、ダメだよな」

嵐田がやってくる。九崎のデスクの周りをうろつく。

九崎「どうしたの」

嵐田「この前出した、スマートトイレのコンペ、最終まで残った」

九崎「すごいじゃん」

嵐田「……」

九崎「どんなの出したの」

嵐田「尿や大便を検査して病気を検知できるデバイスがすでにあるんだけど、分析にちよつと時間がかかるっていう課題があるんだよ。それでも三分くらいなんだけど。その三分の間にトイレを流して、ユーザーは立ち去ってしまう。できればその場にとどまって、結果を見てから去ってほしい。もしそのタイミングを逃したら、あとはスマホでアプリやサイトを開いてログを確認してもらうことになっちゃうんだけど、わざわざ見ないから。それで病気が見逃されるのは残念じゃん。そこで、分析している間、ローディングのアニメーションを便

座に表示するようにしました。分析が進行中であることをユーザーに提示して待ってもらおう。かつ、便座を見るようにすると、自然と自分が排泄したものにも目が行く。ここで観察をしてもらうことで、関心も高める」

九崎「なるほどねえ」

嵐田「便器の上をくるくる回るアニメーションを思いつけたのがよかった。キャラクターデザインではないけど、これはこれでかわいいだろ」

九崎「なんかきつかけとかあったの？」

嵐田「犬の……」

九崎「犬？」

嵐田「イヌイットってわかる？」

九崎「カナダの先住民族」

嵐田「そうそう！ イヌイットについて調べて……その中で思いついて……」

九崎「なんでイヌイット？」

嵐田「なんでだろうね……」

嵐田、逃げて行く。

以倉がやってくる。

以倉「嵐田くん、かわいい動画撮れたから見て！」

九崎「なんの動画ですか？」

以倉「……いとこの所に最近赤ちゃんが産まれて、その動画を。嵐田くんに赤ちゃんのかわいさを知ってもらいたくて」

九崎「以倉さん、最近嵐田さんどこ行ってるんですか？ 特定の社員ばかり連れ歩くのはエコひいきじゃないですか？ 小さい事務所とはいえ、一企業の代表としてどうなんですか？」

以倉「ごめん、ごめん。最近よく飲みに行ってるんだよ」

九崎「車で？」

以倉「帰りは運転代行を使ってる」

九崎「下戸なの？」

以倉「……実は飲めるんだよ」

九崎「ほんとですか？ 私酒豪ですよ？ 絶対潰しますからね、次は必ず呼んでくださいね」

以倉「わかったよ！」

以倉、逃げて行く。

九崎「犬はヤバイよ」

九崎、仕事に戻る。

以倉と嵐田、職場の隅で話している。

嵐田「九崎さんって、以倉さんの隠し子だったりします？」

以倉「なんでそうなるの」

嵐田「たまにエコひいきしてるから。客先でもらったお菓子とか真っ先に渡すじゃないですか」

以倉「そうなの？」

嵐田「そうですよ」

以倉「これは隠してたわけじゃないけど、きゅーさんは僕の先輩の娘さんなんだよ。生まれた時から知ってる」

嵐田「その先輩ってのも？」

以倉「ああ、ファンシーキャラクターのデザイナーだったよ」

嵐田「出た、二代そろってってやつだ。九崎、九崎……」

以倉「ドリーミー・クークーシリーズとか」

嵐田「ドリーミー・クークー？ 知らねえ」

以倉「僕が高校生の時は大人気だったんだよ。キキイちゃんかクークーって感じ」

嵐田、スマホで調べる。

九崎「ドリーミー・クークー。星がきらきら綺麗な夜に、あなたの前に現れた。友だち思いの優しい子。チャームポイントは長いお耳。好きなことはお耳にくるまって眠ること。デビューは1991年。ちょっぴりアンニュイな雰囲気、若い女性を中心に流行。ベッドサイドランプの発売時には、原宿のショップに行列ができた。1994年、シリーズ展開を終了」

嵐田「入手困難、未使用品、ドリーミー・クークーマグカップ、三万円！」

九崎、寄ってくる。

九崎「クークー、売ってるんですか？」

以倉「ね、今の時代に」

嵐田「しかもすげえ金額。（詳細ページを開く）あっ……」

九崎「『この商品はガイドラインに違反するため削除されました』……出品前に審査のフロアを入れるよ、大手なら機械学習の開発くらいできるだろ、ばーか」

嵐田「やだ、見たい見たい。九崎さん、クークー持ってない？ 見せてよ」

九崎「無理！」

以倉「クークーは見れないかもだけど、ほら」

以倉、スマホを見せる。

以倉「ウチのチヨちゃんシリーズなら」

嵐田「あ、知ってる。第一次ベビキャラブームを支えたって、大学の講義で見た」

以倉「これ、きゅーさんがモデルなんだよ」

嵐田「マジ？ 似てないですよ」

九崎「美化されてんの」

以倉「愛情分ね。いいデザイナーだったな」

九崎「……はい」

嵐田「だった？」

九崎「ウチのチヨちゃん。ピンクのお洋服とお花、そしてママとパパが大好き。チヨちゃん
のママの絵日記をモチーフにしたグッズは、世代を超えて国民的ブームとなった。デビュー
は1999年。2003年、ブームの最中、シリーズ展開を終了。メインデザイナーの失踪
が原因だとする都市伝説が、ネット上でまことしやかに語られている」

9.

深夜の事務所。

九崎「ちよつと無理だわ。寝るわ。嵐田さん、三十分後に私が起きてなかったら、叩き起こ
してもらっていいですか」

嵐田「はい」

九崎、アラームをセットして眠る。

嵐田、九崎の荷物をあさる。

クークーのぬいぐるみを見つけ、眺める。

嵐田「かわいい！ ずるいぞ、自分だけ隠し持ってるなんて」

嵐田、スマホで写真を撮ろうとする。

嵐田「写真はダメだっけ」

スケッチブックを取り出し、スケッチをする。

嵐田「実家はいわゆるスポーツ一家。父はサッカーのインストラクター、母は体育教師。俺も小学校高学年でサッカーの強化チームに入って、高一までプロ目指してた。ある日、試合中に相手とぶつかって倒れて、その時ひざをやった感じがした。でも、結構大事な試合だったからそのまま試合続けた。次の日の朝、寮で目が覚めたら膝がめっちゃめちゃ痛くて、ベッドから起き上がれなかった。そこで俺のサッカー人生はおしまい。普通に勉強して大学行けばって周りからは言われたけど、そんなのつまんないと思って、全然分かんないけど美大に行くことにした。一浪してなんとか入って、俺やるじゃんって思ったけど、もう周りのやつは子供の頃からモノつくってたり、画塾行ったり、親も美術系の仕事してたり、そんなのが多くて。丸腰で、何も持たないでギリギリ来たやつって俺ぐらいで。絶対最強になってやるって思った」

10.

畠山からのチャット。

畠山「妊娠初期は悪阻がしんどい時期ですが、まだ安定期に入っていないので妊娠はなるべく隠しましょう。流産した時気まずいので。会議では手にペンを突き刺して眠気乗り越え、吐く時はトイレでこっそりと。妊娠を伝えたらわざとらしく「おめでとう」と言いながら、困って目を泳がせる上司。ぴたりと止まる飲み会のお誘い。自分の知らないところで進んでいく仕事。交通事故並みとかいう出産の身体的ダメージ、眠ることを許されぬ時間おきの授乳、キャリアに響くから一週間しか取れない旦那の育児、じゃあ私のキャリアは？ 発熱で一ヶ月に半分も通園できない第〇希望の保育園。リビングでノートパソコンを開けば、風邪で機嫌の悪い子供が泣き叫ぶ。遅れていく仕事、遅れていくキャリア、遅れていく私の人生。「赤ちゃんはかわいい」と大声で言うだけ言って、その先にご用意しているのは地獄。私も三十年前はかわいい赤ちゃんだったのですが。もうかわいくないから、虐げてよいということ？ かわいくなるのに、なぜ、私たちは産まれてくるのでしょうか」

11.

クライアント企業のオフィス、ロビー。

九崎が待っている。電話をかける。

九崎「今どこ？ 歩いてる？ 走って。そう、そのコンビニ入ってるビル」

嵐田がやってくる。

嵐田「ごめんごめん」

九崎「何やってるの、ギリギリすぎでしょ」

嵐田「ブラッシュアップに時間かっちゃって。でも、今回ののはガチで自信あるから」

九崎「以倉さんのチェック入ってる？」

嵐田「入ってない」

九崎「やばくない」

嵐田「でも、チェックなしでいいって言われた」

以倉の声「最近の嵐田くん、超イケてるから、チェックしてないけど行っちゃって。信じてるよ」

九崎「まあ、以倉さんがいいなら……」

嵐田「もしかして、嫉妬してる？」

九崎「いや。心配してるだけ」

嵐田「大丈夫、大丈夫！」

嵐田、プレゼンを始める。

嵐田「以倉デザインの嵐田です。本日は、来年冬から展開予定でいらっしゃる、家具シリーズのブランドデザインに関してのご提案をさせていただければと思います。ヒアリング内容の改めでの確認になりますが、二十代から三十代前半の一人暮らし女性をメインターゲットにしていると伺いしております。家具のデザイン草案に関してもご共有いただきありがとうございます。えー……釈迦に説法となってしまうですが、かわいいキャラクターにブランドの顔になってもらうと、深い認知や購買意欲の掻き立てにつながります。御社ではすでにいくつかのベビキャラ、かわいい赤ちゃんのキャラクターを採用されており、実績もご存じかと思います」

九崎「ベビキャラ再チャレンジか」

嵐田「しかし、ベビキャラに消費者が飽き飽きしているという話も、最近よく耳にします。ということで、本日も提案するのはこちら！」

嵐田、プレゼン資料をめくる。

犬耳、犬鼻をつけた赤ちゃんのキャラクターが表示される。どちらかというと、人間よりは犬に近く見える。

嵐田「既存のキャラとの差別化を狙ってみました！」

九崎「犬じゃん！」

サイレンが鳴る。

アナウンスの声「違法の『かわいい』を検知しました。すみやかに消去してください」

九崎「まずいまずいまずい」

嵐田「何これ」

九崎「消されちゃうよ。だから犬はやばいんだってば。逃げるよ！」

嵐田と九崎、オフィス内を走る。

九崎、どこかへ電話をかける。

九崎「こちら、コードネーム、キュー。プライベートの方で緊急事態、マルゴーチ発生。異例ですが非常経路使わせてください。嵐田さん、今日何で来ました？」

嵐田「シェアバイク」

九崎「うーん、しょうがない。どこ？」

嵐田「そこにステーションが。借りるの？」

九崎「そう、急いで」

嵐田、スマホを開く。

嵐田「ちょっと待って、キャンペーンのお知らせが」

九崎「早く」

嵐田「現在地の共有を許可しますか？ 許可」

九崎「早く」

嵐田「ログイン有効期限切れ、ログインしなおしてください」

九崎「早く！」

嵐田「現在レンタル可能なステーションを探す、に切り替え」

九崎「ねー、今借りてないんだから、これからレンタルしたいってのはわかるはずじゃん。なんでデフォが『全てのステーションを探す』なんだよ」

嵐田「待って、スマートトイレのコンペ落ちてる！」

九崎「嵐田さん、後ろね」

バイクをレンタルする。

九崎と嵐田、バイクに二人乗りする。

嵐田「なんか、後ろすごい追ってきてる。黒い車が五台？ 六台？」

九崎「ちょっと失礼！」

九崎、懷から取り出した銃で追っ手を撃つ。

嵐田「撃った？ 今撃った？」

九崎、バイクで路地を抜けて車を巻く。

九崎「今から見るものは全部秘密ね」

バイク、地下通路に入っていく。

嵐田「何これ」

九崎「地下通路。建設途中で廃棄されたメトロの路線を改造したの」

嵐田「誰が？」

九崎「私の仲間が」

嵐田「仲間って誰？」

九崎「ちょ、しっかりつかまって！」

バイク、急なカーブを曲がる。

九崎「しかし、どこ行こう」

嵐田「俺、いいところ知ってる。結構山奥なんだけど、誰も来ない安全なところ」

九崎「本当にそんなところあるの？」

嵐田「あるある！」

九崎「とりあえず行ってみるか……」

12.

以倉の家。

以倉が電話をしている。

以倉「はい、はい……では、明後日水曜の十一時に、私と九崎の二名でお伺いします。はい、引き続きよろしくお願いいたします。（電話を切る）マロン、かわいいでちゅねえ。パパ、社長つかれちゃったよ……またヒラのデザイナーに戻りたい……」

嵐田と九崎が入ってくる。

嵐田「以倉さん！ 匿ってください！」

以倉「え！ なんて？ プレゼンは？」

嵐田「すみません、超特大インシデントです」

九崎「また犬かよ！」

以倉「きゅーさん、この子は……愛玩動物じゃない、食用の家畜なんだよ。愛玩動物じゃないから違法じゃない。グレーゾーン。ギリギリセーフ。合法じゃないけど脱法」

嵐田「マロンちゃんって、食べられるんですか？」

以倉「そういうことにして！」

九崎「そういうことにしましょう」

以倉「で、これは何事？ すごく嫌な予感がするよ」

九崎「嵐田さんがプレゼンでミスりました」

九崎、提案資料を以倉に見せる。

以倉「嵐田あ！」

九崎「若手のアウトプットをノーチェックでお出しするのは良くないと思います」

嵐田「すいません」

以倉「いや、上司の僕が悪い。チェックを怠った僕の責任です」

遠くからサイレンの音が聞こえる。

九崎「場所が割れてる。シェアバイクなんて使ったから」

以倉「きゅーさん、嵐田くん、今までありがとう。僕が全責任を負って消えます」

嵐田「消える？」

以倉「誰かが消えないと収まらないから」

九崎「そんな」

以倉「最後に……マロンをどうにか守ってくれないかな」

九崎「ダメです、以倉さんも一緒に逃げましょう」

以倉「いや、いくよ。これが社長としてできる最後の仕事なんだ」

九崎「以倉さん！」

以倉「なんだかんだ社長も楽しかったな」

九崎「以倉さん！」

以倉「マロン、最後まで一緒にいられなくてごめんね」

以倉、泣く。

それを上回る勢いで九崎が泣く。

九崎「以倉さんも来てくれなきゃだ〜！」

以倉「ごめん」

九崎「わ〜！」

以倉「ちよちゃん、ごめんって」

嵐田「この状況……ウチのチヨちゃんソング、二番だ」

嵐田、歌う。

チヨちゃんとっても なきむしさん

あっちもこっちも いやいやよ

いっしょにいていて ママとパパ

だいすきでいてね いつまでも

嵐田「小学生のとき流行ってたな」

以倉「行く行く！ 一緒に行くから」

九崎「（泣き止んで）取り乱しました。経路を手配しますね」

九崎、どこかへ電話をかける。

以倉「君はあとで報告書を書くように。まあ、どのみち事務所はたたむけど」

嵐田「俺のせいで大変なことに」

以倉「原因は？」

嵐田「マロンちゃんがかわいくてたまらず、デザインに取り入れてしまいました」

以倉「今後の対策は？」

嵐田「マロンちゃんはこっさりかわいがるだけにして、デザインに取り入れられない」

以倉「つまり、マロンがかわいすぎるのがいけないんでちゅね〜」

嵐田「禁止されるのも当然のかわいさでちゅもんね〜」

九崎「以倉さん、車出してください」

三人、以倉の車に乗り込む。

九崎「案内するので、運転してください」

以倉「わかった」

車が走り出す。

九崎「次の角を右に」

以倉「はい」

九崎「次は左です」

嵐田「これ、どこ行くの？」

九崎「私たちの拠点」

嵐田「私たち？ ……へり飛んでる。これ、追われてるんじゃない」

九崎「カバン取って」

嵐田、九崎にカバンを渡す。

九崎、カバンからバズーカを取り出し、発射する。

嵐田「意外な一面すぎるよ」

九崎「もうすぐ右の壁に穴が空いてるところがあるんで、気合いで入ってください。中は隠し通路になってます」

以倉「おりゃー！」

車が急旋回しトンネルに入る。

九崎「ひとまず巻けたかと思います。しばらく道なりに走ってください」

以倉「きゅーさん……説明もらえるかしら」

九崎「驚かせてしまい申し訳ありません。これから向かうのは私たち『KAWAIIクラブ』の拠点です」

嵐田「KAWAIIクラブ？」

九崎「大人の部活動です。主な活動内容は二つ。かわいいものを愛でること。そして、この国のかawaiiものを取り戻すこと。クークーもトイプードルも、こんなにかawaiiのに、この国では禁じられている。そんなのかawaii。人間の赤ちゃんもかawaiiけど、強制的にかawaiiと思わせるのはおかしい。かawaiiくないって言えない社会はかawaii。かawaiiってのは自然に湧き立つ気持ちなんだよ」

嵐田「かわいくないって言えない社会……」

九崎「だから、KAWAIIクラブはこっそり準備をしているんです。この国を変える準備を……」

以倉「テロってこと？」

九崎「KAWAIIテロです」

以倉「KAWAIIをつけても許されないよ。きゅーさん、テロ組織のメンバーだったの？」

九崎「いえ、KAWAIIクラブです。大人の部活動です」

以倉「部活動で地下通路は掘らないんだよ。内定出す前はコンプラチェック入れよう……」

九崎「あそこで止めてください」

13.

車を止める。

九崎がカードキーと顔認証で、拠点のドアを開ける。

九崎「狭いですが、どうぞ。私が所属しているプロバガンダ部門の作業部屋です」

以倉「うーん、不穏な名前」

嵐田「これからどうする？」

九崎「しばらく様子を見て、警戒が薄れてきたら国外逃亡かな」

嵐田「仕事は？」

九崎「命の方が大事でしょ」

嵐田「せっかくノってきたとこなのに……」

以倉「圏外だ」

九崎「電波遮断してるので」

嵐田、スマホの通知を眺める。

嵐田「もう一個謝ることがありまして……スマートトイレのコンペ」

以倉「おっどうだった」

嵐田「落ちました」

以倉「残念。講評は？」

嵐田「えっと……『新規性のあるアイデアでしたが、簡易なプロトタイプを作って検証した結果、ディスプレイに座ることを嫌がるユーザーが続出しました。また、滞在時間を延ばす意図での企画でしたが、ディスプレイを確認せずに立ち去るユーザーも多く目立ちました。独りよがりにならず、ユーザーの行動や感覚を想定した企画ができるといいですね。』……くそくそくそくそ、座れや！ ディスプレイに！」

以倉「くそなのは嵐田くんだからね。座ってもらえるもの作るのが君の仕事でしょ」

嵐田「はい……」

以倉「便座をディスプレイにしたんだっけ？」

嵐田「はい」

以倉「確かに、ディスプレイにおしりをつけたくはないかもねえ」

九崎「ディスプレイは汚しちゃダメってイメージもあるし」

以倉「これがスマートトイレだとして……個室に入る、用を足す、流す」

嵐田「この流す時にディスプレイが目に入るんです。で、分析が表示されるまでユーザーは待つ」

以倉「僕は待たないな。忙しいもん」

嵐田「ああ……」

以倉「で、どうするの？」

嵐田「……え？」

以倉「このフィードバックを得て、嵐田くんはどう改善するのさ」

嵐田「えー、以倉さんだったらどうするんですか」

以倉「改善案を個人的に作るけど」

嵐田「じゃなくて、どんな改善案を作るんですか」

以倉「それは言わないよ、嵐田くんが考えなきゃ」

嵐田「うーん」

嵐田、メモ帳を取り出し、ぶつぶつ言いながらアイデア出しを始める。

九崎と以倉がそれを覗き込み、口を出す。

嵐田「デザインは難しい。完成するまでにやばいくらいダメ出し食らうし、ユーザーは思う通りに動いてくれない。でも楽しい。それは、デザインがいつでも、より良い未来を向いているからだと思う。より大勢に、より楽しく、より明るい未来を。そうあるべきだ」

14.

畠山からのチャット。

畠山「人が好きだからデザインやっていると、ある。全然自分と違う人が好き。タブレット操作しないで店員に注文するジジイとか、メールアドレス無限に作って友達招待ポイントぶんどうとする若い女性ユーザーとか、あと電車の中でポロポロポテチこぼしてる小学生。おいおいなんでだよって思う瞬間が、その人と世界を捉え直す瞬間が、楽しい。人と出会うために、少なくとも私は産まれてきたと考えていて、できれば、分かんない人とたくさん時間を過ごせたらいいなと願っていて、だからうちの家にも、歳が離れた、人、子供が来てくれたら嬉しいなって、思ってしまう。あなたが産まれる理由はそれ」

15.

九崎「あれから二週間がたちました。突如現れたトイブードルに、KAWAIIクラブの部

員たちはメロメロ。この子を逃すためならと、総力を上げて国外逃亡ルートを手配しました。ここから遠く離れた港に、クルーザーヨットを用意。それに乗って、隣の国へ逃げます。隣の国では犬の飼育は合法ですし、以倉さんたちも難民として迎えてもらえるかもしれない」

嵐田「迎えてもらえなかったら？」

九崎「……」

嵐田「ねえ！」

九崎「ガソリンは充分入れておきました。行きましょう」

三人とマロン、車に乗り込む。車が発進する。

九崎「地下通路はもうすぐ終わります。一時間ほど、外を走らなければなりません」

嵐田「あ、あれは！ 出口にバリケードが！」

九崎「拠点ごとつぶす気だ。このままフルスピードで！ 強行突破しましょう！」

三人「おおおお！」

車、人とバリケードを蹴散らす。

以倉「抜けた！」

三人のスマホの通知が一斉に鳴り出す。

嵐田「えぐい量の不在着信ある」

以倉「これ、メール確認する時間とかないよね？」

九崎「ないです」

以倉「財務系の連絡来てないかだけ、見てくれない？」

九崎「（スマホを見て）なんか、よしなにやってくれてるっぽいですよ。あっ」

以倉「何？」

九崎「畠山さん、子供産まれそうだって」

以倉「ちょっと早くない？」

九崎「早産なのかな、大丈夫かな」

嵐田「すいません以倉さん、マロンがすごい舌ぺろしてるんですけど、これなんですか？ 外の空気、うめーってことですか？」

以倉「あー、それ車酔い。吐く前にそうなるんだよね」

嵐田「えー」

以倉「窓開けて外見せて」

嵐田「それで治るんですか」

以倉「分かんないよ。車乗せたことなかったし」

九崎の電話が鳴る。

九崎「こちら、キュー。何、拠点が……分かりました。全員退避してください」

嵐田「今度は何？」

九崎「拠点が進め込まれてるって。情報が漏れるとまずい。もう爆破するしかない」

九崎、ボタンの付いたリモコンを取り出す。

九崎「このボタンを押すと、爆破処理が行われる」

嵐田「なんで持ってるの」

九崎「あの拠点はドリーミー・クークーの印税で作られたから、私に権限があるの」

嵐田「どんだけ売れたんだよ」

以倉「ねえ、マロン大丈夫そう？」

嵐田「マロン、こらえてくれ」

九崎「総員退避完了、了解。これより爆破します。*『できたてのポップコーンはいかが？』」

九崎がボタンを押す。

三人が乗った車の背後で、大爆発が起こる。

嵐田「車の背後で巨大な爆発音がした。振り返ると、赤い炎と、膨らんでいく黒煙の塊が見える。爆風で小さな影がいくつも巻き上げられている。よく見るとそれは、拠点で保管してあったファンシーグッズだった」

九崎「キキイちゃん、クークー、にゃんシスターズ、メロディサニー、ヒゲアザラシのボン五郎」

以倉「デディベア、まねきねこ、カエルの貯金箱、うさぎのマグカップ、ペンギンの目覚まし時計」

嵐田「爆発の映像は全国に中継されていた。走っていくアウディTTも、窓から顔を出すマロンの姿も。でもそんなこと、まだ俺たちは知らない。ただただ、爆発を見て、俺は叫んだ。

『かわいいー！』

16.

畠山からのチャット。

畠山「子ども、うまれました！」

17.

港。波の音が聞こえる。

三人が歩いてくる。

嵐田「こんな小さい船で隣の国まで行けんの？」

九崎「行けるよ。これ、隣の国からここまで来てるからね」

嵐田「あ、そっか」

九崎「早く乗って」

以倉と嵐田、船に乗る。

以倉「きゅーさん、残って本当に大丈夫？」

九崎「行くところはたくさんあるんで」

以倉「そっか……」

以倉、嵐田にマロンを渡して船から降りる。

嵐田「え？」

以倉「事務所をちゃんと畳んでからにするよ。社長だからね。それに天才デザイナーでもある！ 信じて任せてもらってるのに、依頼を放り出せないよ」

嵐田「じゃあ俺も」

以倉「嵐田くんはプレゼンやっちゃったからダメだよ」

九崎「以倉さんはワンチャン消えなくて済むんだよね。犬もバレてないし、変なキャラも作ってないし」

嵐田「そんなあ」

以倉「マロン、かわいがってあげてね」

嵐田「……はい」

九崎「……人が来てる。早く行って」

以倉「いや、なんか様子が違うよ。あれは……マスコミだね」

シャッター音とストロボ。

咄嗟にマロンで顔を隠す嵐田。

嵐田がマロンを動かすたびに、カシヤカシヤとシャッター音が鳴る。

嵐田「もしかして、マロンを撮ってます?」

以倉「ダメだよ、写真は! ……え? かわいい? ウチのマロン? そうでしょ! ……」
全国ネットで広めたいって? 全国民が、世界が、マロンを見たがってるって?」

嵐田「国民は新しいかわいさに驚いていた。その驚きが、積み重ねた三十年を一気に押し流してしまった」

九崎「*ほしいものが、ほしいわ。自分が何をほしいのか、人は知らない。見て初めてほしいと思う。そしてこれまでの暮らしが実は嫌だったと知る。今、この国は見た。トイブードルを」

嵐田、マロンを高く掲げる。

全国民がそのかわいさに歓声をあげる。

以倉「そうなんです! ウチの子、世界で一番かわいいんです!」

18.

畠山のチャット。

畠山「か細い泣き声がして、病室の空気が緩んだ。こびりついた血を拭かれて、胸元に置かれる私の子供。ここから地獄が始まるんだな。産まれたばかりの赤ちゃんはベビースキーマがない。顔はスリムで、手足はひよろひよろ。いわゆるかわいい見た目とは言えない。へへへ、でもね、私、他でもない、かわいくないあなたに会いたかったんだよ」

19.

以倉の事務所。

三人が働いている。以倉はマロンを抱いている。

以倉「(電話を切って) 嵐田くん、次の案件、ご指名だよ」

嵐田「マジっすか」

以倉「ベビーカーのプロダクトデザインなんだけど」

嵐田「なんでもお任せください!」

九崎「意外ですね、嵐田さんがベビー用品で頭角を表すなんて」

嵐田「これで連続五件目」

以倉「かわいいって思わないのにね」

嵐田「あのですね、ユーザーへの寄り添いにかわいい、かわいくないは関係ないですよ。そこにはただ、観察と実践があるだけ」

以倉「いいこと言うね」

嵐田「つまり、良い目と良い腕！」

九崎「はいはい」

九崎、クークーが描かれたマグカップを眺めている。

嵐田「それ、次のシーズンの？」

九崎「そう、サンプル。でも色味がちよつと。これじゃ、クークーのかわいさが伝わらないよ」

以倉「ごめん、ちよつと静かに！ ……マロンが」

嵐田「どうしたんですか」

以倉「おやつ食べてる」

九崎「かわいい。間違いない」

以倉「インスタにあげよう」

三人、各々スマホを構えてマロンを撮影する・

嵐田「マロンは一躍大スターに。ついでに事務所も注目を浴びた。新しい時代のかわいいを作る事務所ってことで、仕事の依頼はますます増えた。えげつない忙しさだけど、自分たちが良いと思う未来を、人にも喜んでもらえるってのは嬉しい」

赤子の泣き声と共にインターホンが鳴る。

九崎「あつ、畠山さん！」

終

*サンリオ社 ポップコーンメーカー 呼び込みの台詞より引用

**糸井重里 西武百貨店広告コピー(1988)より引用

上演記録

ぼちぼちやる派 第二回公演 『脱法ブードル♡KAWAIIエクスプロージョン』
2024年7月13日(土) ～15日(月・祝) SCOO L

脚本・演出…石田優希子(ぼちぼちやる派)

【キャスト】

嵐田翔 …… アキミツイシ

以倉宝一 …… 田口和

九崎ちよ …… 手塚(手塚の劇団)

畠山光里 …… 石田優希子(ぼちぼちやる派) ※声の出演

【スタッフ】

音響…岡みのり、吉平真優

照明…磯山茜

宣伝美術…大木佳奈

劇中歌作曲…片山絵里(シアターユニットQD)

撮影…隅田穂乃花

本作品は稽古と並行して執筆を進めました。

出演者の三人の影響を大きく受けております。

アキくん、なごみん、手塚さん、一緒につくってくれてありがとうございます！

また、私・石田と関わってくれる周囲のかたからも発想をもらっています。

職場で出会った人たち、友人、恋人、家族。

特に、六年を共に過ごした元パートナーは、出産と育児に関し思考を深める契機をくれました。

戯曲は作者名とセットで世に出ますが、実際はもっと多くの人間と繋がっています。
この場を借りて、作品に少しでも関わるすべての方へ心よりお礼を申し上げます。

石田優希子